## 周囲の街や村へ続く道

これまで小牧を通る旧道として、尾張藩が名古屋と中山道を結ぶ道として通した「上街道」、上街道から春日井の内津神社の妙見様に通じる「うつつ道」、小牧と清須とを結んでいた「きよす道」を取り上げてきた。その中で旧道がどこを通っていたのか、またその道筋での特色や文化財などについて明らかにしてきた。

今回は、旧道ガイドマップの最後として、小牧の中心から各方面に続く旧道で、これまでに紹介できなかった方面への道を取り上げることとした。市内には、郊外に行くと主要道路と離れた所には多くの旧道が残っている。中でも、変貌の激しい今日でも、周囲の街や村に続く道で、旧道の名残が少しでも見られる4つの道について紹介することとした。

## 入鹿村から入植して切り開いた入鹿出新田

小牧市内には、江戸時代初期の新田開発で生まれた新田が多くあり、そのほとんどが○○入鹿新田の名が付いていた。それは、人工のため池である入鹿池ができたことにより、入鹿用水ができ、その結果広い地域を潤すことで多くの新田ができたからである。今では、入鹿の名が省かれているが、江戸時代にはほとんどのところが○○入鹿新田であった。

ここは入鹿出新田であり、他のところとは違っている。というのもここは入鹿池に沈んだ旧入鹿村の人たちが入植して切り拓いた新田であり、そこから入鹿出新田の名が付いているのである。

白雲山 圓昌寺

尾張徇行記には、「此新田は開発人不知、…入鹿村より百姓九人程、此地へ移りし…」とある。

また、入鹿出新田の寺院は圓昌寺というが、この寺の山号が白雲山といい、これは入鹿池ができる以前旧入鹿村にあった白雲寺にちなんで名付けられたのである。

旧入鹿村の住民の大半は、犬山の前原地区に移り住んだが、一部の人たちは羽黒地区や小牧にも移り住んだ。その子孫が今でも入鹿出新田にいる。

実は、すぐ北にある河内屋新田も、入鹿池造営に尽力した河内（大阪）の堤作りの職人の縁者たちが入植して切り拓いた新田である。

広大な入鹿池造営には、池の出口となるところに丈夫な堤を築くことが難工事であった。そこで尾張藩は、当時堤作りの名人といわれた河内の甚九郎をはじめとした多くの堤職人を呼び、見事寛永10年（1633）に完成させた。およそ180mにわたる入鹿池の大堤防は、今でも百間堤あるいは河内屋堤と呼ばれている。

河内屋新田の老人ふれあいの家（旧高岸寺本堂）横に、船橋家祖先之碑がある。河内屋の新田開発の新田頭として取り組んだ船橋仁左衛門家の石碑である。そして、彼は入鹿六人衆の一人であり、入鹿池の築造から入鹿用水や木津用水などの開削に尽力したのである。

船橋家祖先之碑

小牧の旧道
ガイドマップ
周辺の街や村へつづく道

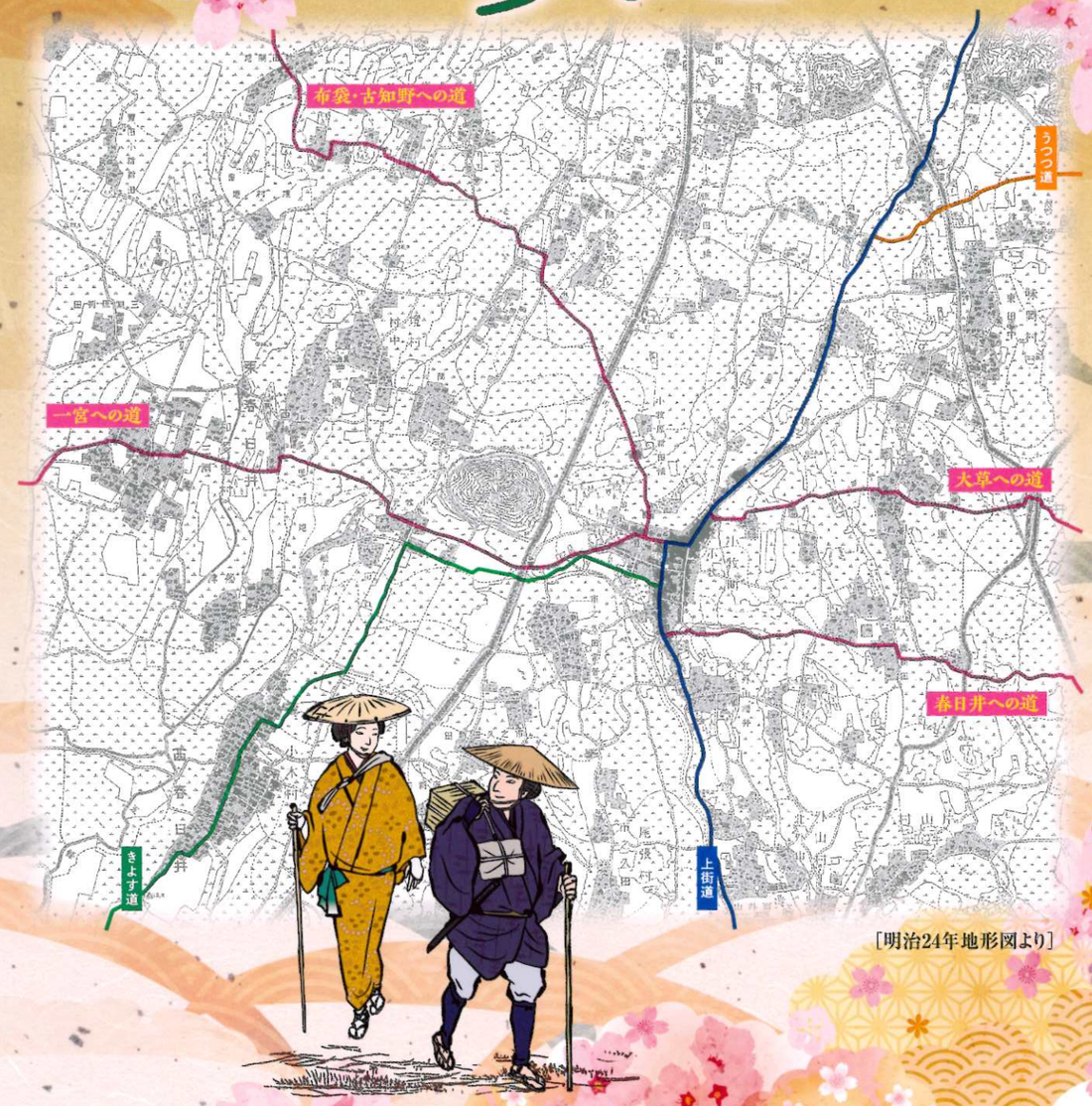
編集／愛知文教大学地域連携センター、小牧市文化財地図作成委員会
委　員：加藤憲吾、酒向道夫、篠田徹 、西川菊次郎、水野弘
事務局：宮崎貴光

発 行／小牧市教育委員会　小牧市堀の内三丁目1番地

令和6年3月31日

Komaki
キミと一緒に、育っていきたい。

# 小牧の旧道
## ―ガイドマップ―
# 周辺の街や村へつづく道



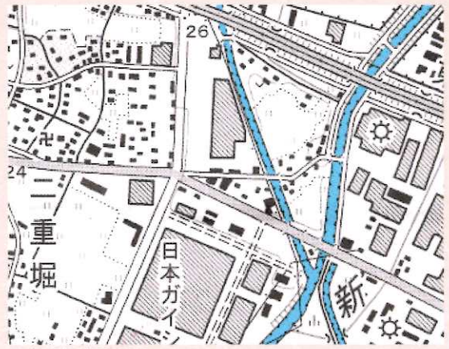
［明治24年地形図より］

小牧市教育委員会

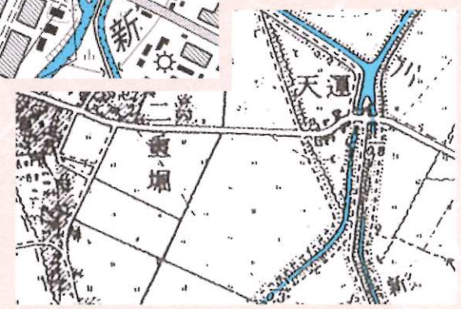
# 新木津用水と運天の地名

二重堀の東を通る新木津用水は、現在、駒越橋のすぐ下の所で、大山川の下部をサイフォンで潜り南東の春日井方面へ流れているが、以前は、もう少し北の所で大山川と合流するようになっており、川幅も今より広く、水量も多かった。昔は、特別の杁樋門が造られ、新木津用水と大山川の方へと流れる水を調節する設備があった。その機械を動かす水守もおり、近くに住む桜井家が担っていたそうだ。その水守が機械を操作・運転することから、昔からこの地を「うんてん」と呼び、文字も運転ではなく「運天」としていた。それが、昭和40年頃の改修で現在のようになった。

新木津用水の水路が現在のように改修される以前は、駒越橋（現駒越上橋）の上部で大山川と合流していた。そのため川幅も今よりかなり広く、夏場は水量も多くなっており大山川と分流させる所までは天然のプールになっていた。そのため、夏には近隣の若者から子どもたちの水遊び場であった。昔は学校のプールも無かったので、味岡や近くの小中学校では水泳大会をこの運天のプールでやっていたそうだ。中には家からふんどし姿で泳ぎに来ている子どもたちもいた。



平成22年地形図より

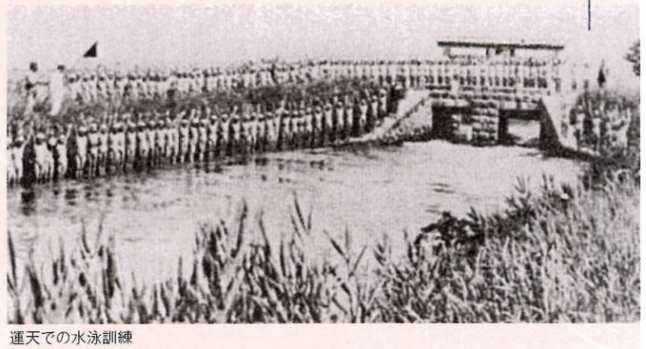


大正13年地形図より

# 運天での水泳訓練

この天然プールを水泳の練習場として利用していたのが県立小牧高校の前進である旧制小牧中学であった。初代校長の織田圓城先生の方針で、生徒の皆泳を目指したことで、大正13年の開校以来恒例の学校行事であった。

昭和2年陸軍大演習の際、昭和天皇が小牧山での統監の後に休憩場所として、旧制小牧中学校に立ち寄られたこと、さらには即位記念ということもあり、ぜひ学校にプールを造ろうという機運が高まり、昭和3年にプールが完成した。そのため学校の伝統であった運天での水泳訓練は5年ほどで幕を閉じることとなった。


運天での水泳訓練

### 二重堀の中学水泳練習場　　稲垣　稔

私は小牧市の二重堀に生まれここで育った。部落の東端で、新木津用水と大山川の落ち合う箇所が中学の水泳練習場だった。（中略）実は前年の大正13年から一回生はここで練習を始めている。この中央で、新木津用水と、大山川の合流する中間地点に中学水泳部事務所が設けられていた。右手前には中学旗が立ててあっていかにも小牧中学水泳場である事がよくわかる。

泳げる者は深い用水路で、泳げない赤チョン組（白帽の真ん中に赤の布切れをつける）は浅い大山川で練習をした。

最初に一年生全員を用水路をいりでせき止めプール状になっている深い箇所（運天という）へ入れ泳ぎを調べる。泳げない者はあっぷあっぷするが、それを水泳練達の上級生が早速引き上げる。こうした試練を経て、泳ぎの能力を判別して以後の指導に備えたものだ、熱心な練習で上達すると、帽子に赤横線が入ってその数の多い事を互いに競い合ったものだ。（後略）

（卒業60周年記念「曳馬の師友」
旧制小牧中学4回生同窓会誌より）

# 巡見道

巡見道という名は、江戸時代、幕府から派遣された巡見使の一行が通った道筋というところから生まれている。巡見使は、天領や各藩がうまくいっているかどうかを確かめるために派遣されたもので、将軍側近の旗本（三名程度）がその任にあたった。

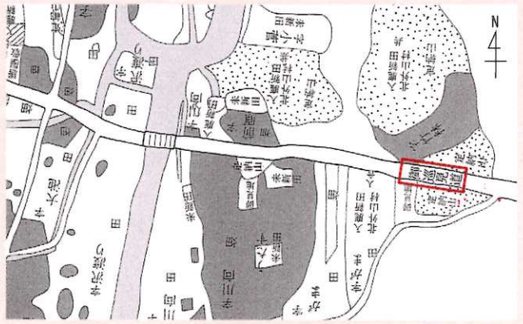
当初は不穏な情報があったり天災などがあったりした場合に、その都度派遣されていたが、五代綱吉から十二代家慶までは、将軍の代替わりごとに派遣されることが慣例になっていた。それも、江戸時代末期には、経費削減を理由に廃止された。

巡見道がどこを通るのかはほぼ決まっており、藩内をくまなく回るため、道は主な街道は少なく里道や地方の街道なども利用していたため、かなり曲がりくねった経路となっていた。尾張部での道筋は左上図のようである。小牧へは、春日井の田楽から小牧へ入り、その後は上街道を北上し、途中から犬山へ入り、犬山からは古知野の北側を一宮へと続くコースとなっていた。

北外山村絵図には巡見道の記載がある。

江南市北部に残る巡見街道

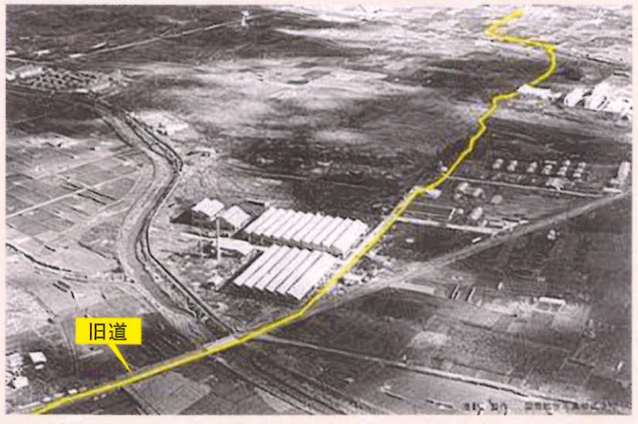
春日井市八田川に
架かる巡見橋


北外山村絵図（天保12年・1841）の市史解読図

# 小牧発展の起爆剤となった工場誘致条例

昭和30年の市制施行に引き続いて小牧市が行ったのが昭和31年3月の「小牧市工場誘致条例」の制定である。この条例は、市の産業の振興と市勢の進展を図ることを目的に、3年間市民税および固定資産税を免除するほか、広い敷地を斡旋することなどの便宜を条件に、昭和41年に条例が廃止されるまで多くの企業が誘致された。そのため、それまで田園地帯であった大山川流域や市の中心から離れた地域は大きな工場が建ち様変わりしていった。

工場の誘致に続き、昭和40年には小牧インターチェンジの完成により、名神の全面開通。続いて東名の開通、トラックターミナルの建設等、小牧が交通・運輸の中心基地として注目を浴びるようになり、小牧市も急激に発展することとなった。



昭和35年ころの東海ゴム（現住友理工）

# 大草方面への道（大草街道）

小牧から二重堀を経て下末・大草を通り春日井の神屋へ抜ける道を、以前は大草街道といっていた。小牧から二重堀に続いていた旧道は区画整理により無くなっているが、二重堀地内は、当時の様子が少し残っており道路の石仏や寺などにもうかがえる。二重堀東交差点から東へ30メートル進み少し北へ折れ、すぐ東へ進むのが旧道である。道は、新木津用水さらには大山川の駒越上橋（旧駒越橋）と続いている。

しかし、駒越上橋を越えると、昔の田園地帯はほとんど工場となり、旧道をたどることはできない。その後、下末の薬師寺付近を通って大草へと続いていた。

## 5 薬師寺





臨済宗妙心寺派。本尊は薬師如来。山門入口には等身大の石地蔵が立っている。

## 1 津島神社

祭神は須佐之男尊。寛正元年（1460）の創建との言い伝えがある。神社前の馬頭観音に「文政十三（1830）寅三月吉日」とある。

## 2 道標を兼ねた地蔵

外堀川橋の東端にある祠。二重堀西入口辺りから移されたものである。「文政六未（1823）十二月日」とある。

## 3 東禅寺

臨済宗妙心寺派。本尊は十一面観音菩薩。また入口には宝暦十二年（1762）の銘のある石仏を含む三十三所観音が祀られている。

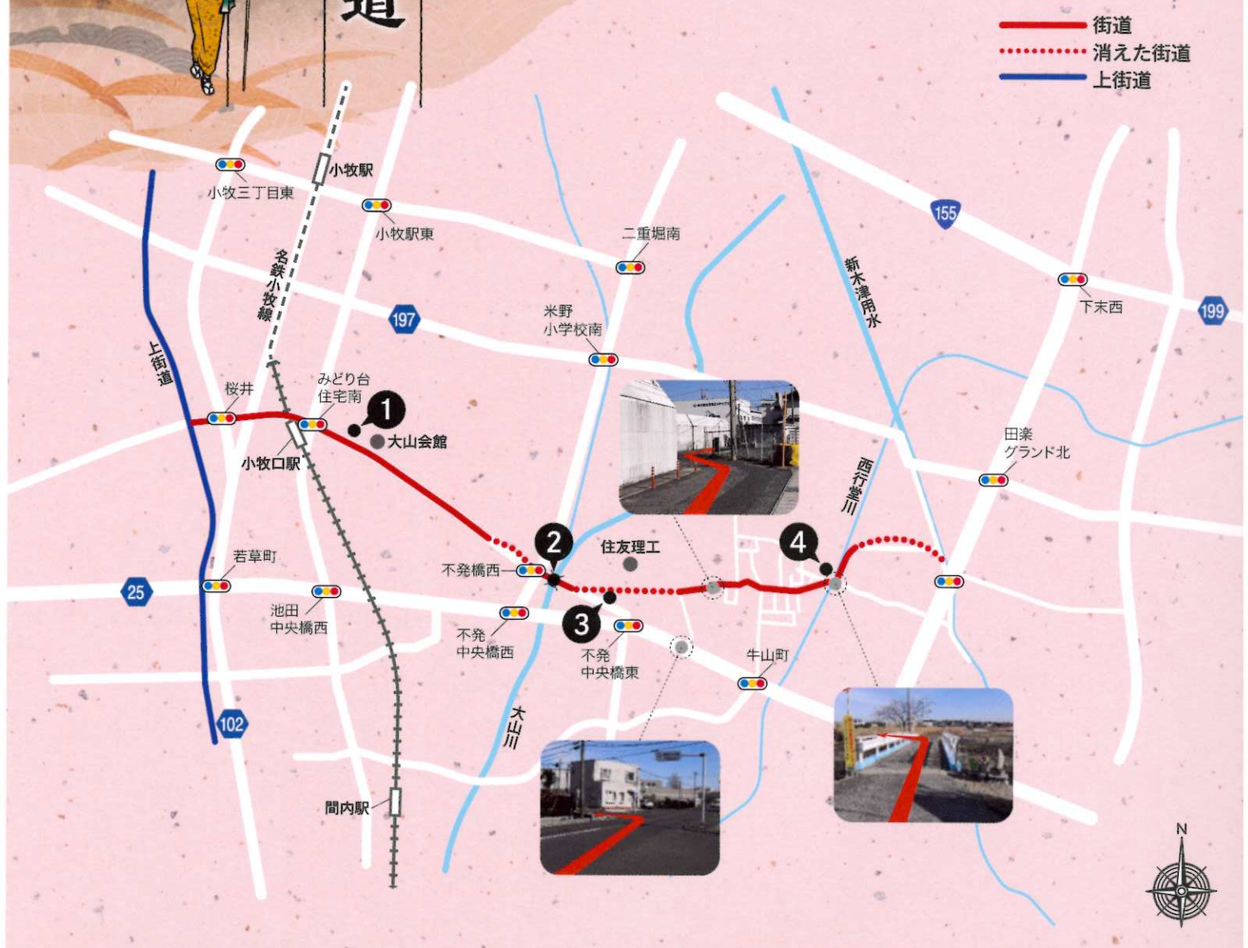
## 4 水神碑

運天の杁（いり）の守り神として現在の位置に移された。「大正四年（1915）四月運天二重堀」とある。隣は大山川の堤防沿いにあった馬頭観音で、「東うつゝ道」と書かれ道標をかねている。

# 春日井への道（巡見道）

小牧から春日井へ続く主な旧道は、上街道の桜井から大山を通り、不発橋付近から今は住友理工の敷地内にある宇田津の森（宇田津砦跡）へ通じ、工場内を東へ進んでいた。

工場の敷地を抜けた後はコンクリート塀に沿ってくねくねと東に進み、その後旧竹林地区の曲がった道を西行堂川の橋のたもとに出た。この道が旧道であり、江戸時代には巡見道であった道である。




## 1 大山神社（神明社）

祭神は皇大神。正面入口に社号標、神門、鳥居が有り、藩塀の奥に切妻拝殿があり、その奥が本殿である。クヌギの古木が県道25号に覆い被さるように枝を伸ばしているのが見事である。

## 2 不発橋（うたずばし）

この地の由来はいろいろあり、その一つに、昔鞍作りの名工が名古屋城築城の際、この地に住むにあたり祖霊を祀り、宇多津明神と崇めたという言い伝えがある。

## 3 宇田津砦跡

天正12年（1584）の小牧・長久手の戦いの際の徳川方の砦のひとつである。現在は住友理工（旧東海ゴム）の敷地内となり、見学することはできない。

## 4 西行堂川の橋のたもとの馬頭観音

この馬頭観音は、地元の人が川底から拾い上げ、橋のたもとに安置したものと言われている。古老の話によると以前は橋の東側の樫の木のそばにあったと言われている。

# 一宮への道

一宮道は、小牧から西方面への道であり、道路沿いの石仏にもその名が刻まれているものが見られる。コースは、小牧の中心から小牧神明社前を通り、合瀬川の土手橋を渡り、元町付近から少し北にカーブし、西之島の辻（現在は変形交差点）付近を通り、三ツ渕から岩倉の八剣へ抜け、さらに一宮に通じる道である。もちろん一宮への道は、西之島の辻付近から北へ折れ、三ツ渕原新田を通り、布袋から一宮の北部浅井方面へ続く道、三ツ渕の北部から石仏を通り、一宮へ続く道など、いくつかのルートが考えられる。

しかし、国道155号が開通し、交通量の増加に伴い、昔の一宮道の名残が見られるところは少なくなってきている。

### ❶ 馬頭観音



清須道との交差点にあり道が拡張の時北側へ移された。この観音様の光背には「右小牧道ひだりまま村くわんおん」とある。この南の辻に石造群があり、祠の中にある馬頭観音もかつて一宮道にあった。

### ❺ 如意輪観音

❹の馬頭観音から国道155号線を斜めに渡り進むと左にまがる路地がある。そこに立つ祠には花が飾られ、微笑んだ如意輪観音菩薩が祀られている。これより南廻りで三ツ渕を抜ける。

### ❹ 馬頭観音

光背には（右）「西一之宮道」（左）「小牧牛道」とあり、西は一宮、東は牛屋をぬけて小牧へ向かう人もいたようである。この辺りは明治時代に道が整備された。

### ❸ 圓通寺

元亀3年（1572）の創建。三渕小学校発祥の地。立派な門を入り左に三十三観音が祀られる。寺の西を通る名古屋道から正眼寺へも向かった。

### ❷ 馬頭観音

一宮へ南廻りと北への道も指し示す。台座正面には「右 あざい一のみや道 中 村道 左 いわくら一のみや道」とある。以前は交差点の西側にあった。

# 布袋・古知野方面への道

布袋・古知野方面への道は小牧から北西方面へ通じる道であり、その道筋は今でもはっきりと残っているところがある。それは、西源寺の西から小牧高校のすぐ東を通る道で、国道155号を横切り、そのまま北西に進み、萱場橋のところで合瀬川を渡り実々神社の裏へと続いている。この辺りから国道41号という大動脈と小牧ICができたことや物流の拠点となる大型倉庫が建ち、様相は大きく様変わりしている。そのため、入鹿出新田に通じる道筋ははっきりしない。

しかし、大筋としては現在の国道155号バイパスの広い道に組み入れられた細い旧道があったことは間違いない。入鹿出新田からは、圓昌寺と神明社の間を通り、南に迂回して大口の御供所から布袋方面へと続いていたそうである。

### ❸ 実々神社



祭神は稲実公（実公天神）。延宝元年（1673）にこの地に遷したと伝えられている。10月に例祭がある。

### ❷ 道標



「左小牧なごや志水すぐなごや巾下道」「右犬山せきすぐほての宮田道」「明治五年（1872）申二月建之」とある。合瀬川にかかる萱場橋のかけかえ工事に伴い現地に移された。

### ❶ 姥ヶ懐古戦場跡碑



天正12年（1584）小牧・長久手の戦いにおいて4月2日豊臣、徳川両軍の間で小競り合いがあった場所として、碑が残っている。

### ❹ 圓昌寺

曹洞宗、ご本尊は阿弥陀如来。寛永16年（1639）土地の開墾の際、春日井市篠木から現在地に移転したと伝えられている。境内には村内にあった三十三観音や馬頭観音などが集められている。